

戦後 76年

8月15日で終戦から76年を迎えます。戦争当時を知る経験者は高齢化で年々少なくなっています。そんな中、鵜野平和祈念の碑苑保存会監事である、塩河清一さん（鵜野町）は、鵜野飛行場建設時から現在までの鵜野の歴史を知っている最後の証言者と言われています。「戦争がどんなものか想像もつかない若者が多くなった。戦争の本当の姿を若い世代に伝えていきたい」と語ります。



網引駅には、列車転覆事故に遭遇した塩河さんが書いた顛末を記した看板が設置されている

鵜野周辺では九会小学校が空襲の被害に遭いました。この辺りは大型爆

空襲

河さん一行は親戚の家に避難することになります。

終戦時国民学校生の

塩河 清一さん (88)

「広島に新型爆弾が投下された。いよいよ戦局が厳しくなる。避難してくださいと言われたのを覚えています」。塩河さん一行は親戚の家に避難することになります。

若い世代へ

「戦争はいけないこと。その一言に尽きる。実体験をしているから余計にそう思います。今の人たちは平和を当たり前だと思っている。しかし当時はそうじゃなかった。若い人たちが国のために自らの命を犠牲にして今の平和な日本がある」と塩河さんは優しい眼差しで語られました。

出会いと別れ

塩河さん宅の隣に特攻隊員が下宿されていました。姫路海軍航空隊で教官をされていた大岩虎吉少尉です。大岩さんには奥さんと2人の子どもがいました。

塩河さんは当時12歳であり、大岩さんはよく一緒に遊んでくれたそうです。「宇佐飛行場に発つ前に送別会をしたんです。その時に奥さんが着物の裾をたくし上げて男物のパッチを履いて踊ったんです。そしたらみんな

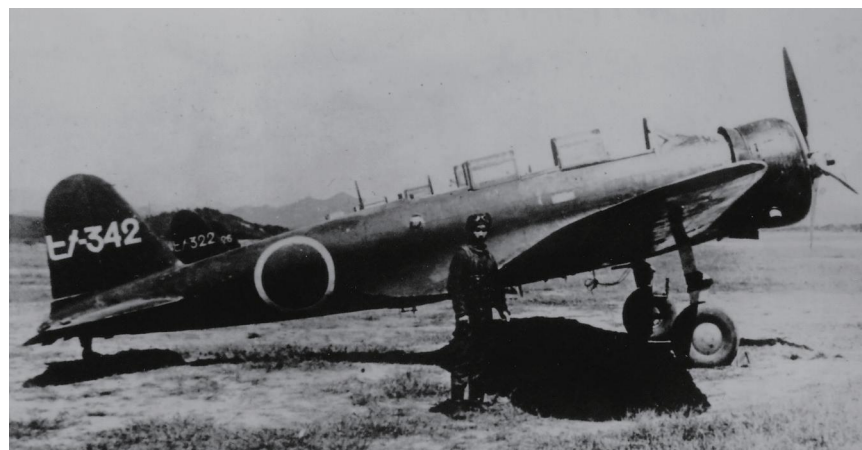
がワツと笑って」。大岩さんとの思い出を懐かしく振り返りました。

昭和20年3月23日出陣の時を迎えます。21機が編隊を組み宇佐飛行場へ旅立ちました。「1機だけが低空飛行で目の前を通って翼を振った。それが大岩さんでした」。奥さんは泣き崩れ、塩河さん家族も全員泣いたといいます。

弾ではなく艦載機の小型爆弾が主でした。防空壕に避難していましたが、音がすごく、生きた心地がしなかったといえます。また、爆弾が投下されると爆風の圧力がすごいので、耳をふさいで目が飛び出ないようにおさえ、口を開けて避難したそうです。日本も応戦しますが、機銃座からの攻撃は相手をけん制するだけで全く役に立ちませんでした。

8月15日終戦を迎えます。「虚脱感しかなかった。日本が負けるとは考えていなかった。何とも言えない気持ちでした」。

当時の鵜野知る最後の証言者



九七式艦上攻撃機・当時の鵜野飛行場にて（上谷昭夫氏提供）

た。太平洋戦争の渦中に、パイロットが不足したため、鵜野でパイロットの養成が急務となり、370機あったうち30機が鵜野飛行場へ飛来しました。海軍は優先的に優秀なパイロットを鵜野へ連れてきて訓練しました。奇しくも特攻隊編成の時に練習機で特攻したため、九七艦攻は鵜野にとっては特攻隊のイメージが強い飛行機となっています。

展示への思い

取材した日でもちょうど製作から半年だそうです。「富士山で言えばまだ3合目ですね」。頂上まではまだ遠いですが、専務は黙々と作業をします。「大変だけど楽しいんです。加西市の皆さん、そして訪れるお客さんの喜んでくれる顔を想像すると頑張れるんです」。九七艦攻について「子どもたちが、すごいと思うってくれることが大事だと思います。まずは、模型を通じて興味関心を持ってほしい。戦争について考えるきっかけになればうれしいですね」。続けて、「紫電改や九七艦攻のような実物大模型は全国見ても加西市にしかないんです。自分たちの市にはこんなにすばらしいものがあるんだと誇りに思ってもらいたいです」。

最後に来春オープンする地域活性化拠点施設『Sora かい』についてお聞きしました。「当時の様子を疑似体験してほしいです。そして、学習の場として平和の大切さを再認識してもらいます。そしたら思いやりのある子どもたちが育つんじゃないかな」。

齊藤専務、残り8カ月頑張ってください。広報誌が発行される日には5合目まで登っていることを願っています。

鵜野飛行場跡周辺には、戦時中の名残をとどめる戦争遺跡が数多く点在します。戦争の歴史を風化させないよう、施設内にある遺跡を、加西市歴史街道ボランティアガイドと北条高校人間創造コース探究活動うずらの班が当時の状況をガイド案内しています。また、平和学習の一環で、全国から修学旅行生も訪れています。

語り継ぐ 戦争の記憶



①防空壕シアターでのガイド②紫電改を前に説明③北条高校生によるガイド④修学旅行生に素振り防空壕のガイド